

# がほだしてきたほい ～熊本ボランティア～

関西福祉大学 熊本支援プロジェクト  
メンバー

代表 桑田 ゆりえ・佐々木 貴経

副代表 佐藤 竜聖

坂本 公一・濱本 将輝・東本 央基・藤原 綾・室井 康希

ボランティア参加者 坂川 歩・関 歩未・吉田 汐里・池田 優梨香・猪口 悠翔・上村 夏芽・  
菅野 美侑・濱崎 葉奈・増見 亮汰・吉岡 佳乃子

## 本ボランティアの背景・目的

九州の熊本県を中心に震度7の揺れに二度襲われた熊本地震から約3年たった。人的・住宅被害に加えて、熊本城も大きな被害を受けた。

発生から一定の時間が経過した現在、求められるボランティア活動も生活復興支援の活動に変わってきている。私たちは熊本県熊本市、益城町、嘉島町、御船町を訪問し、高齢者や障がい者、児童といった幅広い分野・年代の方々の心のケアを行い、また被災者一人ひとりに寄り添い支えあう地域支援活動を目的として、災害支援ボランティアを意義あるものにしたいと考えた。



## 活動期間・場所

令和元年9月9日（月）～9月13日（金）  
熊本県熊本市、益城町、嘉島町、御船町

## 活動内容

熊本市

熊本城見学

益城町

益城幼稚園

益城中小学校放課後児童クラブ

子供たちと交流

語り部の方からお話を聞く

嘉島町

地域支え合いセンターの方からお話を聞く

仮設住宅でのたこ焼き・おにぎり作り、

災害公営住宅における清掃活動

御船町

障がい者施設 ささゆ

利用者の皆さんとのレクリエーション活動

月日	内容
9月9日（月）	午前 関西福祉大学から熊本県に向けて出発 午後 熊本到着 【宿泊】
9月10日（火）	御船町 障がい者施設 ささゆ 熊本市 熊本城見学 益城町 東無田復興委員会 語り部 【宿泊】
9月11日（水）	益城町 益城幼稚園、益城小学校放課後児童クラブ 【宿泊】
9月12日（木）	嘉島町 社会福祉協議会 地域支え合いセンター 仮設住宅、災害公営住宅 【宿泊】
9月13日（金）	午前 関西福祉大学に向けて出発 午後 関西福祉大学到着

## 熊本地震の概要

平成28年4月14日21時26分、熊本県熊本地方を震央とする震源の深さ11 km、マグニチュード6.5の地震（前震）が発生し、同県の益城町で震度7を観測した。

その28時間後の4月16日1時25分には、同じく熊本県熊本地方を震央とする震源の深さ12 km、マグニチュード7.3の地震（本震）が発生し、西原村と益城町で震度7を観測した。M7.3は1995年（平成7年）に発生した兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）と同規模である。

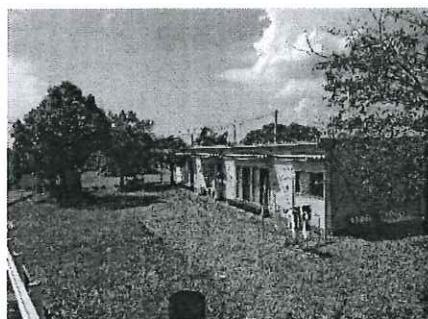
令和元年6月13日現在

死者 270人

重軽傷者 2,734人

熊本市、御船町、嘉島町、益城町での人的被害と住宅被害  
(「熊本県危機管理防災課 熊本地震に係る被害状況について【第291報】」より引用)

市町村名		熊本市	御船町	嘉島町	益城町
人的被害	死者	人	85	10	5
	重傷者	人	770	11	11
	軽傷者	人	943	10	31
住宅被害	全壊	棟	2,456	444	234
	全壊	世帯	5,747	444	3,026
	半壊	人		1,017	675
一部損壊	半壊	棟	15,219	2,397	565
	半壊	世帯	47,732	2,397	3,233
	一部損壊	人		5,773	1,715
	一部損壊	棟	105,085	2,178	1,461
	一部損壊	世帯	82,281	2,178	2,126
	一部損壊	人		6,274	4,953
					14,126



応急仮設住宅等の入居状況 (H31.2.28現在)  
(熊本県ホームページより引用)

区分	県内		県外		計	
	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
建設型 仮設住宅	2,125	4,986	—	—	2,125	4,986
借上型 仮設住宅	5,647	12,556	45	81	5,692	12,637
公営住宅 等	151	370	12	20	163	390
計	7,923	17,912	57	101	7,980	18,013

## 事前学習

思ったこと・学んだこと

- 震災から3年経っており、現状などを事前に把握することが大変だった。
- 受け入れてくれる施設との電話のやり取りのタイミングが合わず、時間を要することが分かった。
- メールや電話での言葉遣いに施設の方とのコミュニケーションの難しさを感じた。
- 企画から実施まで自分たちだけで行う難しさを感じた。
- 書類作成、企画書作りを協力して作ることの必要性を学んだ。

## 障がい者支援施設

概要

- 障がい者施設「ささゆ」で利用者の皆さんとペットボトルボーリングと折り紙で交流した。
- 大規模半壊で立て直しを余儀なくされた施設だが、震災時は冷静な判断でうまく避難できたと聞いた。利用者の方は3年間別の建物での生活を強いられていた。

思ったこと・学んだこと

- 利用者さんと会話するときにゆっくり話すことなどをして、うまく伝えられるように工夫した。
- 施設長さんはコミュニティを普段から広げておくことで、災害時に多くの支援を受けることができたというお話を伺って、普段からの人とのつながりが大切であるとわかった。
- 施設長さんのお話より、支援として何が必要なのか、ボランティアをする側、される側、双方の情報共有が大事であると学んだ。



## 熊本城

概要

- 加藤清正が当時の最先端技術と労力を投じて、熊本城を築城した。日本の三名城の一つと言われ、黒く塗られた外壁が特徴である。
- 重要文化財建造物13棟すべての建造物が被災し、大天守は、屋根瓦がはがれ、しゃちほこも落下した。
- 熊本総合事務所は「修復に10年以上を要する可能性がある」との見通しを明らかにした。

思ったこと・学んだこと

- 崩れた石垣がそのままになっていたり、通行禁止のところがあったりして、地震の爪痕がどれだけ深かったのか想像できないほどだった。
- 貴重な熊本城が被害を受けていることが残念であった。



## 語り部

概要

- 東無田集落は益城町の南西部に位置し、周りを田んぼや畑に囲まれた122戸（139世帯）、人口369名（H29.3月時）の小さな集落である。
- 東無田集落は多くの家が全半壊し（全戸数の8割近く）、死者1名を含む（直接死）、多くの人が被災した。
- 実際に被害のあった地域を歩いて見学し、東無田復興委員会の語り部の方からお話を伺った。

思ったこと・学んだこと

- 復興途中の家や壊れたままの墓地などがあり、まだ復興が進んでいない状態であると思った。
- この震災を通してより地域の絆が深まったと話されており、遠くの親戚より近くの他人という考えが大切だと分かった。
- 現在は震災前より良い集落を作ろうと動かされている、「受援力（支援を受け入れる態勢）」の重要性を学んだ。



## 益城町立益城幼稚園

### 概要

- 入園後2日後に地震があり、年少の子供たちの情報が掴めずに困ったそうだ。
- 地震後、子供たちは地震ごっこ、救急車のまねをして遊んでいた。
- トイレに一人で行けない、母親を探す、怖がる子供がいたという。

### 思ったこと・学んだこと

- 子供たちと触れ合い、楽しい時間を過ごさせていても、震災が少なくとも子供の心に影響を与えているということを知って、心のケアが必要だと思った。
- 先生方も不安な中、子供を見守る大変さを痛感した。
- 子供たちと触れ合う中で積極的に話し合うことが大切であると理解した。



## 嘉島町社会福祉協議会 仮設住宅・災害公営住宅

### 概要

- 仮設入居されている皆さんや地域住民を見守る、地域支え合いセンターの方からのお話を伺った。訪問当時、被災者の皆さんは仮設入居から災害公営住宅への移行時期であった。

### 思ったこと・学んだこと

- ニュースや新聞では知ることができない、被災された住民の方々の生の声を聞くことができ、とても貴重な経験になった。
- 社協と地域住民との距離が近く、社協の方が住民の状況をよく把握されていた。
- 仮設住宅でのコミュニティが心の拠り所になっていることを知った。

## 益城町立益城中央小学校 放課後児童クラブ

### 概要

- 地震後の自宅待機が解除された後も児童クラブには、児童が全体の1/3しか来ていなかった。
- 夜は一人で過ごせない子、児童クラブの建物にさえ入ることができない子もいた。
- 先生方も一被災者として不安な気持ちを子供たちと共有することで、安心してもらえるように努めた。

### 思ったこと・学んだこと

- 震災を経験しているとは思えないほど元気だったと思った。
- 子供たちを怖がらせないように優しく見守ることが、子供の心のケアにつながるということを学んだ。
- 先生方も被災されている中で、子供たちを見守り、気遣う姿勢に感銘を受けた。



## まとめ

### 反省点・課題など

- レクリエーションの内容の詰めが甘く、準備不足の部分があった。
- こちらからの社協の方への連絡が遅れてしまい、調整がうまくいかなかった。

### 全体を通して

- 実際に被災地へ訪れて初めて知れる現状がある。
- ボランティアを行うにあたって、すぐに行うことができない難しさ、企画から実施まですべきことが多く大変であった。
- 災害支援だけでなく様々な領域での支援の在り方を見直すことができた。
- 地域主体の支援、地域一丸となって元の町を取り戻そうという気持ちが重要である。
- 地域でのコミュニティの育成が大切である。
- 地震の恐ろしさ、地域のつながりの大切さを知れる機会であった。

この貴重な経験を活かして、災害が起こった時に、自分たちが能動的に支援していきたい。